

ヴェブレンの「神様」を否定した弟子たち ——科学化とは何か

佐々野謙治

はじめに

今日を称して「思想不在」の時代といわれます。これは、ある意味では当然でしょう。神様を追放したのが近代です。こうして私たちは、「神様不在」の時代を生きています。およそ思想と呼ばれるに値するものは、神様との対話・対決を通して生まれ、鍛えられてきたものです。かくして「思想不在」の時代は、「神様不在」の時代とつながります。ということで、いま一度、ここに神様をお呼びしてみたい。いちよう「経済思想史」を学んでいる者だからです。そこで、少くとも神様はいるのだ、と構えてみたい。否、そういう素振ぐらいは、してみたい。それぐらいは、お許しいただけるのではないか。

なお付言すれば、小稿は、ヴェブレンについての勉強のあい間になした遊びの所産です。いわば私のおしゃべりです。こうしたものを活字にすることの節度のなさを思いました。それに、中身のなさも気がかりです。しかし、自分の無能さを知るのに必要だといわれる「最高の賢明さ」は、私にはありません。

I わかるとはどういうことか ——感じとるほかない真実

神様云々という、すぐにこう聞かれます。「そんなものはいない、いるのだったら出して見せてくれ」と。実は、こうした形で問題を出されても、その存在を証明できないのが神様です。なぜか。それは感じとるほかに術のないものだからです。その働きを感じる人には存在するし、感じない人には存在しない。こうしたお方が神様だ、と私は思います。いつでしたが、九死に一生をえた人が、こういつていたことを思い出しました。「そのとき、神様の御手の手助けを感じた」と。

こういうと、非科学的だ、といわれます。科学は「感じ」云々を排除したところに成立するものだ、と。しかし、事実は違うかもしれないが、論理は切れているかもしれないが、それでも本人にとっては真実だ、というものがあるはずです。上に述べた人についてがそうです。事実は違ったのかもしれない、たまたま助かったのかもしれない。しかし、神様の御手の手助けは、それを感じた人にとっては、真実でしょう。そしてまた、こうもいえるでしょう。生身の人間は、事実や論理（理屈）を生きているというよりも、むしろ感じたところを、真実を生きているのだ、と。

学生時代に不思議に思ったことがあります。近経の学者さんとマル経の学者さんの対立ならばわかります。しかし、むしろ各々内部での対立の方が激しい。また、近経の学者さんとマル経の学者さんが、深くつながっていたりする。なぜか。かわいさ余ってにくさ百倍、というのでしょうか。否、微差こそが違いで、これが人を苛立たせ（いわゆる日本的平等の行きついたところがこれかも）、争わせる。「メクソ、ハナクソを笑う」の類でしょう。ちなみに、大差はもはや違いではない。したがって人はそれに苛立を覚えない。大差はもはや量の違いではなく、弁証法にいう質の違いとなるからです。

しかしまた、こうもいえるでしょう。人を生かし、つなぐものは、感じとったもの、つまり真実です。ここでは現実や論理（学説）は、二義的な意味しかもたない、と。ここを見定めておくことが大切でしょう。

とまれ、事実・論理そく真実だ、とは必ずしもいえないはず。そして

また、この真実(眞実)は感じとるものですから、事実を多く新れば知るほど、知識がふえればふえるほど、それに近づいていける、というものではないはずです。そうでなければ、真実(眞実)は学者先生のものだけだ、ということになりますから。けっしてそんなことはないでしょう。この点においては、事実(眞実)や知識は、感じとる、わかる(眞実)ということ(眞実)を、むしろ妨げるのではないか。

そしてまた、事実・論理と真実(信仰)という二つのもの(眞実)の間には、パスカルのいわゆる「切れ目が」がある。彼によれば、そこは感じとった何かでエイッと埋めるほかない(眞実)ものです。しかし私はこう考えています。学問とか科学も、「感じとった真実」とけっして無縁ではないのではないか、と、たとえば、かのアインシュタインの相対性の理論(眞実)です。こういわれています。彼は、この理論を学校に行く以前の子供の頃に感じとっていた、わかっていた。しかし、それを表現する方法(眞実)を知らなかった。それを後に彼は学校で学んだ、と。後で触れますが、実はスミスやマルクス、ヴェブレンも、彼らのいわゆる感じとった真実(眞実)を、彼らの経済学の出発点、ないし依り所(眞実)にしています。

この人たちの学説・思想(眞実)を、私たちは学んでいます。しかし、それをわかる(眞実)という(眞実)のは、どういうことなのか。つまり、こうです。私はこれまで、制度派経済学者といわれているヴェブレンについて学ぶ一方、わずかながら彼の学説・思想(眞実)を整理し検討するという作業(眞実)をやってきました。たしかに、多少の知識(眞実)はえました。しかし、それで何かわかったか(眞実)といえ(眞実)ば、実に心もとなくなります。わかった、という実感(眞実)がない(眞実)のです。こうして、いったいそうした作業(眞実)をしていて何んになるのか、と時々むなしい思い(眞実)にかられています。表向き(眞実)だけ、それも借りもの(眞実)の衣装(眞実)で着かざ(眞実)っている、という気がしてならない(眞実)のです。身についていない(眞実)、わかっていない(眞実)から(眞実)です。わからない限り(眞実)自分のもの(眞実)にはなりません。では、いったいわかる(眞実)とは、どういうことなのか。

スミスであれ、マルクスであれ、ヴェブレンであれ、彼らの学説・思想(眞実)をわかろうとすれば、やはりそれを整理し、検討(眞実)してみると(眞実)いう作業(眞実)を欠くことはできない(眞実)でしょう。しかし、そうしたからといって、必ずしもわかる(眞実)ということに(眞実)ならない(眞実)のではない(眞実)か。むしろ整理すればするほど、行間から抜け出ていくもの(眞実)がある。たとえば、その整理(眞実)をいかに詳しく(眞実)やったにしても

です。極端な例ですが、かの『聖書』です。事実とか論理という観点から整理すると、それは、本当につまらない、平板な内容のないものになってしまいます。要するに、『聖書』は感じとるということをはずしては、わかりようのないものでしょう。わかっている人には、まさに恵みの本でしょう。わからない人にとっては、こんなにつまらない本はない。

次のような話を聞いたことがあります。高名な学者先生の自他ともに認める一番のお弟子さんがいた。この方は先生以上に先生のいわれるところをスッキリと整理されておられるそうです。しかし、あるとき先生はこういわれたそうです。「彼が一番、私のいうところがわかっていない」、と。こういうことも大いにありえるわけです。

ところで、わかるということは行間を読む、感じとるということと、けっして無縁ではないでしょう。否、感じとるということをはずして、わかるということはありえないのではないか。そしてまた、わかったという実感は、直接に伝えられるものではないでしょう。こうしてわかってても書けないし、もちろんわからなくては書けない。とすれば、書くということは、その挟間でなされる作業だ、ということになります。

かの滝沢先生は、わかったと実感したことを、なんとか伝えようとして、これでもか、これでもか、と多くの作品を書き続けたのではないか。しかるに、この先生を批判する人は、こういいます。「同じことばかりいつている。少しも発展がない」、と。ここには発展とは何かという問題もありますが、とまれ私はこう思っています。滝沢先生は同じ神様を指し示し続けた人、いまどきめずらしく操を立てた人。

ところで、わかったというそれは、その人自身のものであります。つまり単なる知識ではなく、わかったという実感はです。となると、学問研究とは何か、ということになります。それを通してわかったというものは、個人のすぐれて主観的なものだ、ということになりますから。滝沢先生がまた、よくこういつて批判されるゆえんでしょう。「あれは滝沢ぶしだ」。しかし、誰もが同じくわかる客観などというものがあるのか。もしあったにしても、そういうものが私にとっていったい何になるのか。人は人間一般を生きてはいません。私を生きています。できることならば私も、はやく佐々野ぶしを喰りたい(も

う十分に唸っているのではないか、といわれそうですが), と思っています。学問研究も、つまりはそのためのものではないのか。人はわかったと思う真実を生きる者です。

もう少し続けます。いつでしたが、社会学者と文学者が、その名前はすっかり忘れていますが、対談していたときの記事を見たことがあります。社会学者が実に理路整然とお話しなさる。そのつど文学者が、「そうかな、そうかな」と呟いているのです。そこで、なるほど文学とは、社会科学の文脈から、その論理からこぼれ落ちたところをやるものか、と思いました。文学とは、感じとったところを、真実を問題にするものか、と。

しかし、よく考えてみますと、社会科学も人間についての科学です。それはまた、文字、言葉の体系です。とすれば、社会科学も、文学、つまり感じとる真実の世界と全く無縁だ、とって済ませるわけにはいかないでしょう。やはり、どこかに接点、つながりはあるのではないか。そうでなければ、社会科学もけっして生きた活力あるものにはならないでしょう。いうまでもなく、社会科学は人間のための科学です。

ちなみに、社会科学の巨匠ともいえるスミスやマルクス、ヴェブレンらは、後に見ますが、彼らが感じとった真実、神様を彼らの学説・思想の前提にしています。あるいは、それを依り所にしています。自然科学でさえ、その始源に神様をおかないと、底が抜けてしまう、といわれています。まして社会科学は、というわけです。

ところで、スミスやマルクス、それにヴェブレンの書物が「古典」と呼ばれるものであることに、異論はないでしょう。しかるに、古典とは時代の変化に耐えてきたものです。では、何が耐えさせてきたのか。それは時代を超えた何か、不変なるもの、つまり神様と彼らの学説・思想がどこかで触れていたからではないのか。こういって、そうした神様を否定したのがマルクスだ、といわれるかもしれません。しかし、彼も時代を超えた不変なるものの存在を認めています。いわゆる「ギリシャ芸術の永遠の魅力」*というのがそれです。

*「身体および精神として生きるほかない人間は、すべて、日々自らの身体を養わなけ

ればならないと同時にまた、意識的であれ無意識的であれ、必ず、日々新たに精神の糧を求めずにはいられない。生れ死んでゆく太古以来永遠に不変なこの人間的事実を前にして、彼は一度かぎりの人生の意味を問わずにはいられない。そして自己自身の精神の支柱を何ものかに求めずにはいられないのである。このような人間の精神生活の中枢に関わる現実には、数千年前に生まれたギリシャ人と現代に生きるわれわれとの間に、何らの本質的な相違もありえないであろう」(岩瀬文雄『経済と宗教』風媒社、1988年、75～76頁)

おもて向きでは(あつかましい私と違って、概して人前での神様の話には、照れがともないますから)、ヴェブレンもまた、神様を否定しています。しかし、マルクスについてもそういわれていますが、彼が否定しているのは、当時、流布していた神様です。人はそれぞれに自分の神様(幻想)をもたなくては生きれない存在です。これが唯幻論者、かの岸田先生の教えるところです。なお、およその学説・思想は、すでに述べましたが、何らかの神様を前提にしない限り成り立たない、といわれています。

ちなみに、スミスやマルクスやヴェブレンらを取りあげて云々するとき、その彼らの神様に深く思いをよせずに、読みとばしてきたのではないか。その上で、彼らの学説・思想を整理し検討するという作業に終始してきたのではないか。こうした反省、悔い改めをしながら、次に彼らの神様について考えてみたいと思います。しかし、それに先立ってここに、神様の概念について少し触れておきたいと思います。

『聖書』の「ヨハネ伝」に次のような話が出てきます。復活したイエス・キリストの衣にマリアが触れたとき、イエスはこういった。「わたしにすぎりついて(すぎりつき続けて)いてはいけません。……わたしの兄弟たちのところに行って……」云々。これは、イエスを絶対視・神格化し、彼にもたれることを戒める一方、イエスと私たちが等しく神様の祝福を受けて、同じ地平に生きている存在だ、ということをお教えたものではないか。こうして、私は次のように考えています。

イエスは、いわゆるキリスト教も含めて、およそのこの世の何々主教を絶対視し、神様とすることからの解放者であった。そうすることでまたイエスは、真の神様への、滝沢先生のいう「原関係」への、バルトのいう「インマ

ヌエル」への、目覚めを促した人であった。ここにいうそれが、私のいう神様です。

II ヴェブレンとミッチェル, コモンズ ——やはり「神様」は必要だ

さて、スミスやマルクスの神様とは、どういうものなのか。否、彼らはそれをどこで感じとっているのか。ここに、「見えざる手」(スミス)、「労働の分割」(マルクス)という概念に注目したい、と思います。これらの概念の背後には神様が予感されています。つまり、「見えざる手」とか「労働の分割」とは、スミスやマルクスが感じとった神様を、彼ら流に表現したものです。

スミスの「見えざる手」とは、いうまでもなく神様のそれでした。スミスは、この御手の働き、導きを信じていた。いかに人間がそこ(いるべき場所)から離れようとも、必ず人間をそこにつれ戻してくれる。この御手の働きを信じて、スミスは彼の経済学を構築した。こうしてスミスが信じている神様は「見えざる手」です。すなわち、彼は資本主義という偶像を絶対視し、神様とはみなしていません。この意味で彼は、いわゆる資本主義者ではありません。いわゆる社会主義者でもないことは、いうまでもありません。次はマルクスの神様についてです。

「労働の分割」とは、衣・食・住に係わるものを過不足なく供給するように労働を分割するということです。これは滝沢先生のいう「客体」としての人間生存の定めです。かくしてここには、かく定めた「主体」・神様の存在が予感されています。スミスとの関係でいえば、それは「見えざる手」の働く場所を指し示したものです。ここでのみ、人間は生きることができます。マルクスもこういっています。それをはずれては人間は生きれない、と。この意味で「労働の分割」は不変的で絶対的なもの、人間の手によっては少しも変えることのできないものです。したがって、これがマルクスの神様です。彼はそれを信じて、それを足場にして、彼の経済学を構築した。

ところで、資本主義(市場)といえ、社会主義(計画)といえ、「労働の分割」をなす、その形態の違いにすぎません。したがって、それはけっして絶

対的なものではありません。こうしてマルクスは、社会主義という偶像を絶対視し、神様にはしていません。彼はけっしていわゆる社会主義者ではありません。もちろん彼はいわゆる資本主義者ではない*。念のためにいえば、崩壊したのは、いわゆる社会主義者たちの国です。偶像信仰はいつか必ず行きづまる、ということでしょう。

※マルクスにとって経済学とは「世俗的神についての神学であり、『資本論』は、「擬似宗教的現象としての資本主義を論じている」(R. Tucker, *Philosophy and Myth Karl Marx*, Cambridge, 1961, P.203)。「社会主義とは精神の現象である。……それは新しい宗教になろうと欲し、人間の宗教的な質問に答えようとする。……社会主義はキリスト教に代わろうとして出てきて、キリスト教に代わろうと欲する」(N. ベルジャーエフ, 三宅賢訳『ドストエフスキーの世界観』パンセ書院, 1958年, 126-127頁) ここにいう資本主義や社会主義が、私のいう偶像としてのそれです。マルクスはけっして偶像崇拝者、いわゆる社会主義者ではなかった。そういえば、マルクス自身が当時そう語った、と伝えられています。

以上、「見えざる手」や「労働の分割」というスミスやマルクスの神様に相当するのが、「製作本能」というヴェブレンの概念です。それは、人間をして労働をなさせて、その無駄をさけさせる神様です。そこで次に、ヴェブレンのこの神様に留意しつつ、彼とミッチェルやコモンズらとの関係について見てみたいと思います。従来のスミス研究について云々することから始めます。

スミスには「まだ」神様が残っていた。この残っているということが、スミス研究においては、積極的に評価されずにきた。否、「まだ」残っているから、それを排除するのだ、という方向で、スミス研究はなされてきた。そしてまた、これがスミス経済学の精緻化、科学化だ、と考えられてきた。しかし、ここを滝沢先生流に言えば、こうなります。スミスは神様を感じとっている。その存在に確信をもって、それを信じて、彼はそこから出発している。ここがスミスの偉さだ。マルクスやヴェブレンについての私の評価も同じです。

ところで、そうした人たちの学説・思想を継承し、発展させる、「科学化」するとはどういうことなのか。私の学生時代の話です。かの森嶋先生がマル

クス経済学をしかるべく整理した本をながめたことがあります。たしかに、きちんと整理され精緻化されている。しかし、どこか何か違うな、と感じたのです。まさに私の感じでした。はっきりと云々はできないのですが、こう感じたのです。これはマルクス経済学ではないのではないのか、と。こうして私は、学説・思想を継承し、発展させる、とりわけ「科学化」するとは、どういうことなのか、少し考えてみたいと、と思ったのです。

そこで私は、ヴェブレンとミッチェルやコモنزらとの関係に注目しました。というのも、こういわれていたからです。ヴェブレンは「アメリカ制度派経済学」の創設者、ミッチェルやコモنزらはその継承者だ、と。つまり、ミッチェルやコモنزらは、ヴェブレンの経済学を継承し、「科学化」し、発展させた人だ、と。しかし、はたしてそういえるのか。いえるとしても、それはどういう意味においてか。こうして私の「アメリカ制度派経済学」についての勉強が始まりました。以来ずっと同じことをやっています。ここでまた同じことをやろうというわけです。

さて、ヴェブレンの「制作本能論」です。これが彼の経済学を中心、否、基底をなす概念です。そしてまた、これこそがヴェブレンが経済社会に働くと感じた、彼の神様です。ヴェブレンの言葉でいえば、「経済的真理の最高裁判所」です。「製作本能」は、かかるものとして生産の制度を生起、発展させ、やがて無駄や浪費という点で限度をこすと、それを否定し、新しい制度を生起、発展させていく。とすれば、この神様こそ、いま出てきて欲しい神様です。とまれ、このように「製作本能」が働くということを信じて、ヴェブレンは彼の経済学を構築した。これが、「制度の変化・進化」の過程の解明を主題とした「アメリカ制度派経済学」と呼ばれているものです。

しかるに、その経済学の継承者といわれているミッチェルもコモنزも、ヴェブレンの神様・「製作本能」を否定ないし排除しているのです。このことからしてすでに、彼らをヴェブレンの継承者だ、とはいいがたいでしょう。しかし、岸田先生もいわれるように、人は何かを信じ、依り所としない限り生きていけない存在です。後に見ますが、ミッチェルやコモنزらが信じている神様は、資本主義という偶像です。ヴェブレンにしてみれば、彼らは邪教の信者だ、ということになります。

もっともミッチェルやコモنزらがヴェブレンの「製作本能」という神様否定ないし排除するには、そうするしかるべき理由があります。否、ある意味では、それは当然だ、ともいえます。それはヴェブレンの信仰によって成り立っていますし、したがって、その神様の働きを感じない人には存在しないものだからです。そして何よりも、それはミッチェルやコモنزらが強調する、実証的分析・数量的分析になじまないものだからです。こうしてヴェブレンの「製作本能」という概念を否定ないし排除した彼らは、たしかにヴェブレンの経済学を「科学化」したといえます。ヴェブレンの経済学を実証化・数量化、こうして精緻化したという意味においてです。

しかし、ここに見落されてはならないことがあります。その科学化は、ヴェブレンの体制批判の精神を失わせ、かつ彼の資本主義の基本矛盾の認識を欠落させる、という犠牲を払ってなされているのです。ミッチェルやコモنزらによれば、単に諸集団の経済的利害の対立・矛盾が存在する社会、それが資本主義でした。こうしてヴェブレンの経済学は、彼らによって平板化され、矮小化されているのです。ちなみに彼らは、資本主義に多少の欠陥のあることは認めつつも、それを最良の体制だといいつけておられます。こうして彼らは、資本主義という偶像を絶対視し、神様とみなしているのです。この意味で、彼らはいわゆる資本主義者です。

ところで、ヴェブレンは体制消滅者です。しかも彼は、社会主義を一方で展望している人です。しかし、だからといって彼は、いわゆる社会主義者ではありません。彼の神様は「製作本能」です。いわゆる社会主義者（したがってマルクスではありません）を、ヴェブレンは、「多血漢」、要するに頭に血がのぼって連中、それから「おめでたい連中」、要するに舞い上った連中、と批判しておられます。とまれ、体制の消滅を説き、社会主義を展望している点では、ヴェブレンはマルクスと同じです。両者の違いはといえば、ヴェブレンは必ずしも社会主義になるとはいわない点です。退行の理論があるからです。軍国主義への逆行というのがそれです。

ヴェブレン研究者としてよく知られている高先生という方がおられます。その研究の広さ、深さには常々圧倒されておられます。しかし、社会主義になるか、軍国主義になるかわからない、ヴェブレンには「あるべき世界の夢は

存在しない」といってしまうわけにはいかないのではないかと。少なくとも「夢は存在しない」とはいいがたいでしょう。ヴェブレンは「製作本能」という神様を信じておられるからです。高先生ご自身がご指摘なされていたように、逆行といっても、それは「製作本能」の許す範囲のことですから。

とまれ、つまるところ「製作本能」という神様が働く、というのがヴェブレンの世界です。この意味で彼にも夢は存在していますし、彼もつまるところ社会主義に向うという展望を有していた人です。なおマルクスとの違いはといえば、人間のつかまえ方にあります。

マルクスが考えていたように、人間は合理的存在ではない、それほど賢い存在ではない。そのように神様は人間をつくっていない。したがって一種の合理的社会、社会主義へ直線的に向うとは考えられない。否、ヴェブレンによれば、ときに非合理的なバカげたことをやるのが人間である（こうした点の分析にヴェブレンは文化人類学的手法を用いています）。ゆえに、逆行だつて十分にありえる。しかし究極的には、無駄や浪費を嫌う「製作本能」という神様が働く。こうして社会主義に向う。こう考えていたのがヴェブレンでした。

しかし、いうまでもなくヴェブレンは、いわゆる社会主義者ではありません。くり返しますが、彼は社会主義という偶像を絶対視し、神様とみなしていません。「製作本能」こそが彼の神様でした。こうして、ヴェブレンはまた、資本主義という偶像を絶対視し、神様とすることからも免れています。

ところで、その道筋はここでは省きますが、ミッチェルやコモンズらは改良主義の経済学者でした。彼らは、資本主義というこの世の偶像を神様にしていました。やはり多少のしかるべき「手直し」(改良) 必要だ、というのでしょう。ちなみに、ミッチェルやコモンズらは、こう考えています。人間はおよそのことを「見える手」、つまり政策によってやれる、人間の「意志」によってやれる。不足しているのは、人間行動、したがって制度に関する知識や技術である、と。

明らかにミッチェルやコモンズらは、人間中心主義者、いわゆる近代主義者です。こうして、資本主義という偶像を神様とする、いわゆる資本主義者であるミッチェルやコモンズらの行き着いた所は（この点、いわゆる社会主

義者たちも同じですが), こうです。つまるところ人間を神様に見たてているということです。もともと偶像なるものが、たとえそれがいかなるものであれ、人間のご都合で作り上げたものです。とすれば、いわゆる社会主義者に向けられた批判は、ミッチェルやコモنزらにも、そのまま向けられるでしょう。すなわち、こうです。彼らは「頭に血がのぼった連中」, 「舞い上った連中」である。

以上、ミッチェルやコモنزら人間中心主義者、いわゆる近代主義者には謙虚さがない、ということになります。滝沢先生流に言えば、「人間の分をわきまえない」、ということになります。やはり真の神様は必要でしょう。では、スミスやマルクス、ヴェブレンの神様は真の神様たりえているのか。いつかまた、たいくつしのぎに変えてみたい、と思います。

付記：小稿のなかに出てくるヴェブレン、ミッチェル、コモنزについての言及は、次の拙著に基づきます。『アメリカ制度学派研究序説』創言社、1982年。『制度派経済学者ミッチェル』ナカニシヤ出版、1995年。なお以下は、このおしゃべりに際して参考にさせていただいた主要な文献です。

- (1) 滝沢克己『カール・バルト研究』著作集2, 法蔵館, 昭和50年。
- (2) 滝沢克己『哲学・経済学論集』著作集9, 法蔵館, 昭和49年。
- (3) 滝沢克己『現代哲学の課題』著作集5, 法蔵館, 昭和48年。
- (4) 岸田 秀『ものぐさ精神分析』青土社, 昭和54年。
- (5) 岸田 秀『20世紀を精神分析する』文芸春秋, 平成8年。
- (6) 岸田 秀『幻想を語る』青土社, 昭和56年。
- (7) 西部 邁『経済倫理学序説』中央公論社, 昭和58年。
- (8) 西部 邁『人間論』日本文芸社, 平成4年。
- (9) 西部 邁『幻想の保守』文芸春秋社, 昭和6年。
- (10) 岩瀬文夫『マルクスにおける経済と宗教』雁思社, 1988年。本文のなかの R. タツカーと N. ベルジャーエフに関しては、この本からの孫引です。
- (11) A. スミス, 水田洋訳『国富論』世界の大思想, 14, 15, 河出書房新社, 昭和40年。
- (12) A. スミス, 米林富男訳『道徳情操論』未来社, 1969年。
- (13) K. マルクス, 大内・細川監訳『資本論』マルクス=エンゲルス全集, 23, 24, 25, 大月書店, 1965年。
- (14) K. マルクス, 大内・細川監訳『書簡集』マルクス=エンゲルス全集, 32, 大月書

- 店, 1973年。
- (15) K. マルクス, 大内・細川監訳「経済学批判」マルクス=エンゲルス全集, 13, 大月書店, 1964年。
 - (16) K. バルト, 井上義雄訳『教義学要綱』新教出版社, 昭和26年。
 - (17) K. バルト, 小平尚道訳『信仰告白』新教出版社, 昭和28年。
 - (18) パスカル, 松浪信三郎訳『パンセ』世界の大思想, 8, 河出書房新社, 昭和40年。
 - (19) Paul T. Homan, Contemporary Economic Thought, New York: Book for Libraries Press Inc., 1968.
 - (20) Joseph Dorfman, The Economic Mind in American Civilization, New York, Augustus M. Kelley Publishers, 1969, Vol. 4.
 - (21) Thorstein Veblen, The Theory of Leisure Class: An Economic Study in Evolution of Institutions, New York: Macmillan, 1899.
 - (22) Thorstein Veblen, The Engineers and the Price System, New York: Augustus M. Kelley Bookseller, 1965.
 - (23) Thorstein Veblen, The Theory of Business Enterprise, Clifton: Augustus M. Kelley Publishers, 1973.
 - (24) Thorstein Veblen, The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts, New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1964.
 - (25) Wesley C. Mitchell, Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism, ed. J. Dorfman, New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967. Vol. 1.
 - (26) Wesley C. Mitchell, The Backward Art of Spending Money and Other Essays, New York: Augustus M. Kelley Inc., 1950.
 - (27) John R. Commons, Institutional Economics: Its Place in Place in Political Economy, Madison: The University of Wisconsin Press, 1959.
 - (28) John R. Commons, The Economics of Collective Action, ed. K.H. Parson, New York, 1950.
 - (29) John S. Gams, Beyond Supply and Demand: A Reappraisal of Institutional Economics, Westport: Greenwood Press Publishers, 1976.
 - (30) Joseph A. Schumpeter, Ten Great Economist: From Marx to Keynes, London: George Allen and Unwin Ltd., 1952.